聖霊降臨後第１６主日（特定２１）　　金持ちとラザロ　　２０２２．９．２５．

私は、今年の７月から、２か月に１つのテキストを作って連続６回の神戸教区の神学塾運営委員会というところが主催している通信講座を担当しています。そして今は１１月の、「聖書をどう読むか　物語と考古学」という３回目のテキストを書いているところです。聖書を大切にしているユダヤ人の先祖。イスラエル人というのはどこから来たのか。そしてどうして聖書を作ることにしたのか。

このことについては、２年前に教区報でも書いたのですが、最近の考古学の研究では、イスラエルという名前を持った共同体というのは、東のメソポタミヤから旅をしてきたアブラハムの子孫でもなければ、モーセに率いられてエジプトを脱出した人々たちの子孫でもない。現在のイスラエル共和国があるカナン地方の平原に点在していた多くの都市国家で、特権階級に支配されていた貧しい人々が、反乱、革命を起こして自分たちの平等な社会を作るために、それまでの町を焼き払って、エルサレムなどがあるイスラエルの東側の山や丘のある地域に移り住んだ。その共同体がイスラエルとよばれるようになった。つまり元々は同じカナン地方に住んでいたカナン人たちだった、というのです。そしてその中には、エジプトに奴隷として連れて行かれた人々もいたが、そこから脱走をはかり、イスラエルに合流したが、その脱走の途中で九死に一生を得る体験もあり、またほかの地方の伝説もあったが、皆同じカナン人だったという話です。

その人たちは、それぞれの階級社会を是認する偶像崇拝などの多神教をやめて、次第に一人の神様によって人間は平等に作られた、という一神教の思想がそだち、その考えを支えるために各地の神話を一つのイスラエルの先祖の物語にまとめた。恐らくこの作業は、東のバビロンで奴隷生活をしている時、他の神々を礼拝することを拒否し、国が破れて、たとえ貧しい奴隷生活をしても、人間の尊厳を保ちたいという生き方から聖書ができあがったのだろうと思います。

そんなテキストを作りながら、果たして私たちは現代の社会全体の問題。特にこの３０年くらい、国全体の支配する者と支配される者。豊かな者と貧しい者の差が大変顕著になってきたことをほったらかしにしていいのか。人が粗末に扱われる社会ができあがってしまっていないか。このような状況にあって、私たちはこれを良しとしていいのか？と今日の福音書は、私たちに問いかけているように思えました。皆さんは、このたとえ話をどのように受け止められるでしょうか。

物語は、先ずこの世に生きていた頃の、金持ちとラザロの様子を語ります。金持ちは上等の服を着て、ぜいたくに遊び暮らしています。一方ラザロは、体にはできものだらけで、貧しく、食べ物に事欠いていました。それが、死んだ後は、立場が逆転して、ラザロは、信仰の父であるアブラハムのすぐそばで、宴会の席についています。一方金持ちは、地獄の炎の中で苦しんでいるわけです。

この世でぜいたくに暮らし、遊びほうけていると、やがて死んでから地獄に落ちるし、反対にこのラザロのように、生きている間、あまりよい目にあわないばかりか、ひどい貧しさの中で見捨てられている者は、神様が見捨てないで、天国で幸せに暮らす、という筋書きでしょう。でも、そんなことを教えるために、イエス様はこの話をされたのでしょうか。富というのが、そのまま悪いものであって、反対に貧しさというのがそのまま良いこと、と結論付けられるでしょうか。

イエス様の時代、当時のファリサイ派の人たちは、「富は、神様の祝福のしるしで、貧乏は、反対に神様のさばきのしるし、という受け止めでした。でも、これが正しい聖書の考えか、と言えば、そうではなさそうです。
このことについては、旧約聖書の中の箴言に、大変貴重な考えが述べられています。
『貧しくもせず、金持ちにもせず／わたしのために定められたパンで／わたしを養ってください。 9: 飽き足りれば、裏切り／主など何者か、と言うおそれがあります。貧しければ、盗みを働き／わたしの神の御名を汚しかねません。』（箴言３０章８節後半から９節）

富というのは、それがあまりに多くなると、神様を見失い、忘れさせる危険があります。そしてまた、貧しさの中にも同様の危険があることを、この箴言は指摘していることを覚えておきましょう。

ただし、イエス様は、富と貧しさを、神様の前に、同じ価値のものとは、見ておられません。
「貧しい者は幸いだ」（６：２０）と言われましたし、また、「富んでいる者が、神の国に入るのは難しい」（１８：１５）とも言われました。

どうしてかと言うと、富んでいることと、貧しいことを比較する時、富んでいる方は、得をし、楽をしています。しかし、貧しい者は、損をし、苦しんでいます。そして、神様は苦しんでいる者の側に立たれる神様です。そのことは、イエス様の生涯が示しています。十字架を背負う、というのはまさに、苦しんでいる者と共に歩む、神様の姿を表しています。

神様は貧しい人に心をかけてくださいます。その人を何とかしようと行動されるのです。でも、それは、富める人を心にかけない、ということではありません。神様は、豊かな人が、貧しい人を助ける、ということを通して、富める者も、解放しておられるのです。つまり、富の空しさを知らせ、富を頼りにしたり、富のとりこになることから解放して、自由にしてくださるということです。ですから、神様は貧しい人を助け、金持ちを解放して自由にするということで、どちらにも平等だ、ということになるのです。

ちなみに「ラザロ」という名前は、「エレアザル」というユダヤ人の名前を短縮した言葉で、「神は助けられた。」という意味があります。

ですから、イエス様は、富それ自体を、良いとか悪いとか、言われるのではなく、このルカの福音書の１５章から続く、放蕩息子の話、不正な管理人の話、そしてこの金持ちとラザロの話を通して、財産を自分のために使うことは、自分をだめにする。しかし、それを他人の幸福のために使うなら、その富は、生かされる、というメッセージが、ずっと流れているのです。

かつて、アルベルト・シュバイツァーは、自分の住んでいるヨーロッパの富と、地中海を挟んで隣り合うアフリカの貧しさ、苦悩、悲惨さを照らし合わせて、この「金持ちとラザロ」のたとえは、「直接われわれに語られたもの」であると結論づけました。

シュバイツァーは、ヨーロッパに住むわれわれは金持ちである。一方アフリカには、哀れな「ラザロ」が横たわっている。ところが、金持ちは愛情が欠けていたため、ラザロに同情せず、また、自分のなすべきことを告げる良心を持たなかったので、ラザロに対して罪を犯した。まさに、われわれは、自分の玄関の前で貧しい者に対して罪を犯している。このように語ったシュバイツァーは、そのあと遠いアフリカに出かけて行ったのでした。ただ、彼はアフリカ人を低く見ていた、という批判があります。

私たちは、自分たちが豊かな金持ちだという見方で、聖書を読んでしまっていました。しかし、国民の多くが、円安による物価高のために苦しんでいます。一億総中流、という言葉は過去のものとなりました。日本に住む者の多くが実は貧しくなっている、ということを踏まえて、「貧しい人を助けてやろう」ではなく、今日の福音書を通して、私たちがみんな幸福になるために、今何をすべきか、という視点から自分の生活を見直したいと思います。